

## 心理学の学習意義を学習者にどう実感させるか

—一般意味論による心理学体制化の有効性の検討—

● 藤澤伸介

### 要約

入門期の学習者にある領域を教育する場合、基礎知識を理解させたり基礎技能を習得させたりするだけにとどまらず、学習の動機づけのために学習意義を伝える必要がある。心理学の学習の場合、一般意味論の体系を学習する事が学習意義を伝えるのに最適な方法の一つだと考えられているが、本研究では、実際に学習者に「自分自身や社会に対する適応力をつける」ことができること、実感させることができているということ、学習後の反応の質的分析により確認した。

### 問題と目的

どの領域であれ、ある学問分野が教育課程に組み込まれる時、それは「その学習内容が学習者によって、授業期間終了後も継続的に活用されることが期待されている」ことを意味する。例えば、中学や高校で必修として数学が教えられているということは、ただ数学の知識があれば良いとか各単元の演算処理能力があれば良いということだけでなく、その後の人生で数学的な考え方が身につについてほしいからである。実際、日常生活で数学の知識や各種演算それ自体が必要になるということは、特殊な分野の専門家でない限りほとんどないが、数学的な考え方なら日常いたるところに登場する。人々が支払う各種公共料金は、その利用状況を独立変数とする関数になっているし、企業経営を成り立たせるには、座標空間上で損益分岐点を考えないわけには行かない。理科学習の目的は科学的リテラシーを習得するためであるし、歴史学習の目的は、ある時点で起きた出来事とその影響で起きたさまざまな出来事に因果関係を見いだすことによって、将来の状況を予測して適切な行動を選択できるようにするためである。このようにどの学問分野も、教育課程に組み込むことを決定した人達は、その分野を習得した場合どれだけ意義があるかを熟知しており、その必要性を認識しているから教育課程に組み込むのである。

しかしながら、いったん教育課程が決定されると、実際の教育はその学問分野の専門家の手に委ねられるのが普通である。専門家にとってのその分野の基礎的体系は、先行研究の集大成であり、自分の専門を成立させている基盤としての意味を持っているため、専門家である教師にはその学問の面白さや習得意義は自明のものである。従って、その分野に全く興味がなく習得意義が分からない人々に、どこが面白いとか、誰でも学習する価値があるということを伝えていくことが重要だという発想になかなかならないし、重要だと分かっても、どうしたら良いか分からない教師が多い。残念ながら、これが現在の教育の実態である。

ある分野の知見がどれだけ興味をそそるものであるとか、習得しているとどれだけ役に立つかなどは、学習意欲の源泉になるものである。従って、教育において「その分野のどこが興味深く、習得がどれだけ有意義であるか」ということは、最も力を入れて学習者に伝えられるべきである。しかし、学習者が習得の意義も分からないままに学習させられている例が、前述したように学校教育ではあまりにも多く、これは大学の教育においても言えることである。

筆者の専門とする心理学でその入門書となる各種概論書を見ても、基礎となる代表的な研究成果が体系的に紹介されているだけで、それをどのように学習すると自己成長に繋がるのかについて述べられているものはほとんどない。個々の研究成果を利用すると特定場面がうまく乗り切れることを紹介した、雑学集、恋愛指南書、会議技術、営業裏技マニュアルなどは巷にあふれているが、それらは単なる知識の寄せ集めの how-to 本でしかなく、心理学的ものの考え方の提案にはなっていないのである。心理学の学習意義の一つは、それによって適応行動が取れるようになるということだろう。「適応している」というのは、社会制度や組織の中で、人が適切な対人関係と心理的安定性を保ちながら行動でき、あるいは自分自身の心理的世界に対し最も効果的な行動が取れている状態である。逆に、自分が置かれている状況とか自分自身の心の状態に対して適切な行動が取れず、自分自身に不利益を招いたり周りの人に迷惑がかかっている状態を不適応という。心理学を学習して、自分をより適応的にすることができるようになったとすれば、それは学習の成果があったというものだ。

さて、このような問題意識にたって心理学を見た時に、「心理学的ものの見方、考え方」として一般に提案できる内容として、どのような内容が考えられるだろうか。筆者は「一般意味論」の体系が、まさに最適な体系の一つであると考えている。

一般意味論は、Alfred Korzybski (1879-1950) が創始 (1933) した理論体系である。日本での出版物としては、ハヤカワ (1985) が有名であり、その他にラポポート (1965) 他何点かが存在する。もともと心理学の一領域というよりは、独立した一つの学問体系として提唱されたが、心理学にも大きな影響があり、アルバート・エリスは自身の提唱する理感情行動療法 (REBT) が一般意味論から発展させたものであることを認めている (Ellis, 1994)。

ここで、一般意味論の主張を簡単に述べておくことにしよう。「十人十色」というコトバがあるが、人の考え方は同じ状況にいても様々である。これは、人間の情報処理系の仕組みは同一であっても、その働かせ方に個人差があるからである。また同一人でも、時によって考えが変わったりする。なぜなら、人は思考過程で必ず抽象化を行うが、抽象化のためには情報の選択や捨象が必要なため、その都度異なった抽象化がなされたりするのである。同じ経験をしても、有難い点だけ見て幸せ気分に入る人もいれば、嫌な事だけ見て愚痴る人もいるというようなことだ。

コミュニケーションの場面では、事態は更に複雑になる。コミュニケーションでは、話し手と聞き手が存在するので、その過程で両者の情報処理系が別々に働くからである。その結果、伝達に歪曲が生じる。例えば、嬉しそうな顔を見た話し手が「Aさんは笑ってました」とだけ言う時、その場面を見ていない聞き手ならAさんが馬鹿にしていると理解するかもしれない。このような誤解は、自分や相手の抽象化の過程に絶えず注意していないと、気づきにくく避けがたいものだ。複数解釈の可能性に気づいてさえいれば、意味の確認でお互いの誤解は避けられる。

人間は、自分の体験を言語という記号に抽象化して概念を形成し、概念を更に抽象化したり、分類したり、組み合わせたりしながらものを考えていくので、歪曲や誤解は様々なレベルで発生する。その結果、不必要に悩んだり、人間関係でトラブルを抱えたりすることになるのだ。一般意味論では、こうした情報の歪曲が発生しやすい点を順を追って指摘し、言語の使い方を絶えず意識することによって、事実に基づいた考え方 (これを「外在的思考」と言う) ができるようにすることを主張している。「外在的考え方」をすれば、個人としては心の健康を維持する助けになるし、社会においてはお互いが協力しやすくなるからである。

1980年代までの一般意味論の書籍においては、もっぱら論証と例証によって理論が構築されてきた。しかし、近年心理学、認知言語学、脳科学各分野での諸研究が進展したため、一般意味論

内で示されていた人間の特性に関する諸命題が、実験や調査による検証を経て、より確実なものとなってきた。筆者は、S. I. ハヤカワの論証の枠組みの中にこれらの研究成果を組み入れ、更に日本での事例を沢山含めて、心理学上の理論として再構築し上梓した（藤澤，2011）。

心理学自体については様々な認識が可能であるが、その研究対象に注目して、実験系認知心理学、発達教育系心理学、社会系心理学、臨床系心理学の4領域から成ると見ることが多い。（ここでは、心理学自体を研究対象とする領域は除く事とする）そのように分けた場合、一般意味論を構築するには、この4領域すべての知見を総動員することが必要である。言い換えれば、一般意味論を紹介すると、心理学の4領域すべてを紹介することになる。冒頭で、教育課程における各科目は、学習者に習得の意義を認識させる必要があると述べた。しかも、心理学では場面固有の how-to 本が中心という現状にあって、まさに一般意味論の体系で心理学を紹介することが、心理学全領域の統合的かつ意欲的な習得に貢献すると考えられるのである。

とはいっても、一般意味論の体系を教授する授業を行うことにより、その学習の成果として学習者の日常行動に教育側が期待するような変化が現れるかどうかについては、理論的根拠を確認するだけでなく、実際にも確かめる必要があるだろう。ただし、「この授業は役立ちましたか」というような本人の印象に基づくアンケートでは、実際の生活場面で適応行動が新たに生じたかどうか見極められないし、教育効果の浸透時間に個人差があることを考えれば、授業直後の行動の量的把握といった、心理学でよく行われるような方法も適切とは言えない。また、教育効果といっても、理論体系の中の基幹部分の内容が習得されての変化なのか、枝葉末節部分の影響なのかも区別される必要があるであろう。そのためには、自由記述報告の質的分析が、一つの可能な見極め方になるであろう。

そこで本研究では、一般意味論の教育によって、学習者に期待される適応行動がどのように生ずるかを、学習者による自由記述報告の質的分析によって、明らかにすることとする。

## 方法

前節で述べたような趣旨で、筆者の所属する跡見学園女子大学文学部臨床心理学科の教育課程には、学科開設時より一般意味論を学習するための「人間の行動」という科目が基幹科目として置かれているので、設置趣旨にあう自著をテキストにすることができた機会<sup>(註)</sup>に、半期の授業終了後に自由記述による質問紙調査を行った。対象は大学2年生140名である。質問は「この授業を受講することで、その影響により、あなたの行動に何らかの変化がありましたか。もしあれば、その変化を具体的にお書き下さい。」とした。用紙は複数回答が可能であるようにした。処理に当たっては要点をカード化し、回答にどのようなパターンがあるか、一般意味論が主張する10の原則のどの原則に影響を受けたか、変化は適応性の向上の方向であるか等の点から分析することにした。

一般意味論が主張する「外在的思考をするための10の原則」は、以下の通りである。

- (1) コトバは物ではない。
- (2) コトバの「意味」はコトバの中ではなく我々の中にある。
- (3) 「～は…である」に注意。断定は評価錯誤を固定化する。
- (4) 文脈が意味を決定する。
- (5) コトバは、情動的内包と感化的内包を同時に伝える。
- (6) 言語には前記号的用法もある。

- (7) 定義で考えるより具体例で考えよ。
- (8) 見出し番号と日付けを使え。
- (9) 抽象のレベルの混同に注意する。
- (10) 二値的考え方ではものの本質はわからない。多値的に考えよ。

## 結 果

【反応のパターン】 反応のパターンとしては、次の3通りがあった。

(a) **問題解決型**：「以前から解決したい課題があった。一般意味論で、解決のヒントになることを見つけた。試したらうまくいき、課題が解決した。」というパターンの反応である。[課題→ヒント→試行→解決]という流れの中で、一般意味論が問題解決のヒントとして機能している。

【例】(6-3) 私はこれまでストレスをため易く、一人で悩むことが多かった。一般意味論の学習でカタルシスの効果というものを初めて知り、ストレスをためた時には誰かを見つけて話を聞いてもらうことにした。そうすると本当に心が軽くなるのが感じられた。これからは意識的にこういう発散を試みるつもりだ。

(b) **問題発見型**：「問題がないと思っていた。一般意味論的に考えたら実は問題だと気づいた。認識や行動を改善したら状況が好転した。」というパターンの反応である。[自分に問題を発見→認識・行動の変化→事態好転]という過程で、一般意味論が問題発見の役を果たしている。

【例】(6-4) 自分のストレスを発散するために、「あの人最悪!」「もう嫌だ」などの愚痴をmixi日記に書いていた。しかし、これは私にとって良いだけで、日記読者には悪影響があると分かったため、mixi日記にマイナスなことを書かない方針に変えた。不思議なことに私自身良くないことがあまり起きなくなった。

(c) **意味理解型**：「意味不明のことがあった。一般意味論の学習で意味が分かった。認識や行動を改善した。」というパターンの反応である。[意味理解→新方針の採用]という流れの中で、一般意味論が意味理解を助け、適切な行動方針が取れるようになっている。

【例】(6-5) 親や教師から読書を勧められ続けてきたが、なぜなのかわからず、本は面倒なので遠ざけてきた。今回読書は心の健康を維持したり、新しい観点から自分の認識に刺激を与えるという意味があることがわかったら急に読書がしたくなり、名作を少しずつ読み始めた。自分の子供には意義を教えたい。

これらの結果から、一般意味論の学習が、問題解決、問題発見、意味理解を助けていることが分かる。

### 【10の原則との対応】

以下の代表例のように、10の各原則のすべてに対応する変化の反応があった。

(1) **コトバは物ではない**。これは、記号と指示対象が全く無関係であるにもかかわらず、人は両者を混同しやすいので、注意を促す原則である。

【例】(1-1) 中学時代、担任とウマが合わず、今でも思い出すと嫌な気持ちになる。偶然だが街にはその担任と同じ名前の商品や店があり、見る度に不快になっていた。一般意味論で「コトバは物ではない」ということを学び、その担任と商品や店は無関係だと意識できるようになってから、あまり気にならなくなってきた。(問題解決型)

【例】(1-2) 私は入試で不合格だった時の受験番号がゾロ目だった。その時以来、ゾロ目は不吉だと思うようになった。しかし、今回の学習で記号と指示対象を混同しているのに

気づき、これまでデジタル時計のゼロ目表示まで嫌だったのが、気にならなくなった。(問題解決型)

[例] (1-3) 好きなアーティストのライブ会場では、アーティスト名入りレトルトカレーが売られており、市価の何倍も高価だったのに喜んで買っていた。しかし、名前とカレーが無関係だと学習したことにより販売戦略だと気づき、無駄な買い物をしないようになった。(問題発見型)

(2) コトバの「意味」はコトバの中ではなく我々の中にある。コトバの受け取り方には大きな個人差があるのに、通常は気づかない。「自分なりの意味」の存在に注意喚起する原則だ。

[例] (2-1) 友人とのもめ事で、「コトバに原因があるかも」と考えられるようになった。友人を評して「おしゃべりな人」と言って嫌な顔をされた時、コトバの内在的意味を友人と確認しあったら、私は「話題が豊富で面白い人」という意味、友人は「自分の事ばかり話す嫌な奴」という意味と分かり、すぐに和解できた。同じ単語でも人により意味が異なるという原則は重要なので、今後も注意していきたい。(問題解決型)

[例] (2-2) アルバイト先には学生に混ざってフリーターの人が一人働いている。私は、フリーターの方はこちらに悪影響を及ぼすと思っていたので、避けていた。しかし、概念化の過程で偏見が生じることを学習し、自分はフリーターに偏見があると気づいた。そこで、積極的にその人に話しかけたら、結構気が合う人で仲良くなれた。(問題発見型)

[例] (2-3) かねがね「跡見はお嬢様学校」という偏見が不快だった。しかし、偏見について学んだら、自分も「東大生はガリ勉」と思っていて、構造が全く同じことに気づいた。今は大学を気にせず一個人として接するように意識している。(問題発見型)

(3) 「～は…である」に注意。断定は評価錯誤を固定化する。誰かのある行動を見て、勝手に推論から、分類したり、原因を決め付けたりしがちだが、それが正しいとは限らない。

[例] (3-1) 化粧の濃い女子を「ギャル」と決め付け、避けていた。しかし、一般意味論を学習して事実を確かめたくなり、ギャル風な容姿の子に積極的に話しかけてみた。すると趣味の合う良い子で、すぐ友達になれた。化粧だけで判断できないと分かった。(問題発見型)

[例] (3-2) 「遅刻者は、時間にルーズな人だ」と、他人の行動をその人の性格の現れと思いきみやすいと気づいた。仕方ない事情があったかもしれないのだ。勝手な思いこみをしないように気をつけたい。(問題発見型)

[例] (3-3) 「挨拶したのに、あの人は無視した」と思うことがよくあった。しかし、報告文練習をしてから、この文は断定だとわかった。報告文を作ろうとすると他の色々な可能性に気づけるので、人間関係で不快なことがあった時にその場で報告文を作る習慣をつけた。(問題解決型)

(4) 文脈が意味を決定する。同じコトバを使っても、文脈が変われば意味が変わる。適切な理解のためには文脈の手がかりに注意する必要があるという原則だ。

[例] (4-1) 母は食事準備の調理中、私に「大きい皿を出して」ということがある。適当に大きめの皿を出すと「そんなに大きくなってよい」と言われてしまうことがあり、こういう意思疎通の悪さが結構ストレスになっていた。一般意味論を学習して、皿を何に使用しているかの文脈の説明を求めることにした。しかし、母としては、何に必要なかなどいちいち詳しく説明するのは面倒なようだ。そこで、一般意味論の別の原則も思い出し、必要な皿の分類の抽象度を下げてもらうことを試みた。つまり、欲しいのはどん

な模様の皿かを尋ねることにしたのだ。これで苛々から解放された。(問題解決型)(この例の場合は原則(7)も活用)

(5) コトバは情動的な内包と感化的内包を同時に伝える。コトバの内在的意味には、その語が表す概念(情動的な内包)とその語に付いている感情(感化的内包)があることに注意を促す。

[例](5-1) メール交換中何度も誤解が発生し、困っていた。「書きコトバはプロソディがないので感情が伝わりにくい」ことを学び、これが行き違いの原因だと思った。そこで重要案件は電話や面談に変えたら、誤解が減った。(問題解決型)

[例](5-2) 接客のアルバイトでマニュアル通りに言っているのに、評価書ではいつも「もう少し丁寧な言葉遣いを心がけましょう」とコメントされ、訳が分からず困っていた。しかし、コトバは感化的内包も同時に伝えることを学び、お客に対する気持ちが籠っていない可能性に気づいた。そこで、決められた言葉を使う時に「気持ちよく買い物して頂きたい」と思いながら接客するよう変えてみた。すると「大変感じの良い接客でした」とコメントが変化した。感化的内包の重要性を実感した。(問題解決型)

(6) 言語には前記号的用法もある。言語を情報伝達的手段とだけ考えていると、社会的結びつきの言語や指令的言語への適切な対応が取れなかったりする。情動的叙述の姿に惑わされない注意が必要だ。

[例](6-1) 挨拶といえば、これまで無意味な習慣だと思っていた。しかし、挨拶は今後親交を継続したい意思の表明であり、相手に対して自分がオープンであることを意味し、安心感を与えるものだと知ってから、挨拶が重要だとこれまで以上に思うようになり、相手が気持ちよくなるような、爽やかな挨拶を心がけるようになった。(意味理解型)

[例](6-2) 人々の交わす天候についての会話等無意味だとずっと思っていた。しかし、社会的結びつきの確認という重要な機能があることを知ったので、接客のアルバイトで「暑いですね」「お気をつけて」等の言葉がけを積極的に行った。するとお客の私に対する態度が激変し、私を覚える客も増えて仕事がやり易くなり驚いた。(意味理解型)

(7) 定義で考えるより具体例で考えよ。定義で考えると内在的思考に陥りやすい。現実の問題解決を図るには、具体例で考えれば外在的思考が可能だ。地図で見つからなければ現地を探せとの教訓である。

[例](7-1) 問題は具体化する程解決しやすくなることを初めて知った。漠然とした野球練習より、練習内容の具体化が必要と気づき、ゴロの打撃、丁寧な捕球、ダッシュ開始時5歩の加速等、具体的な向上目標を考えることにした。(問題解決型)

[例](7-2) 独善的思考に陥らないために外国語学習が必要という考え方は目から鱗だった。訳読だけでは文章の抽象的理解に留まるので、具体的に文化的背景まで学ぶようにしたら外国語学習が面白くなり、意欲的に取り組めるようになった。(問題解決型)

(8) 見出し番号と日付けを使え。分類が同一だと個性を見なくなり、ステレオタイプな判断をし易い。だから、個別性に注意が払えるように見出し番号と日付けが必要になるのである。

[例](8-1) 見出し番号の方法は画期的だ。男子に殴られた、変質者に遭った、ストーカー等々の体験を身近に聞いて、男性不信に陥っていた。しかし見出し番号を付けて、兄弟、先生、幼なじみは信用できたことを思い出し、不信感が氷解した。(問題解決型)

(9) 抽象のレベルの混同に注意する。記号使用時には部分情報から概念が形成され、無関係な内在的意味が付いて誤概念になりやすい。記号が実体と混同されると事実誤認が発生する。

[例](9-1) 地元の駅前商店街で痴漢被害に遭って以来、そこに行けなくなった。PTSD消

去のためのエクスポージャーという方法を知り、勇気を奮い起こして敢えて現場に行き、何も起きないことを複数回確認した。今は気軽に駅前に行ける。(問題解決型)

[例] (9-2) 私はバイクの音を聞くと怖くなって足がすくむ。なぜなのか不思議だった。今回抽象のレベルの混同を学び、忘れた過去がないか親に聞いて調べた。すると幼児期にバイクと接触事故を起こしていた。この不適応症状を消すため、不快ではあるが最近では意識的にバイクの音を聞いている。エクスポージャーのつもりだ。(問題解決型)

(10) 二値的思考ではものの本質はわからない。多値的に考えよ。 程度評価、複数視点からの考察を促す原則である。

[例] (10-1) 悪い点のテスト答案など見たくなかった。「悪い得点＝能力欠如＝学習は無駄」と考えていたからだ。でもこれは二値的思考だと気付いたら「悪い得点＝弱点判明＝補強すれば習得」とも考えられることが分かった。それ以後、悪い点でも答案を見るのが楽しみになった。(問題発見型)

[例] (10-2) ジョハリの窓を見て、私の中にも自分の知らない面があるのはその通りだと思った。私には「頭が悪い」という自己概念があるが、それは正しくないかもしれない。自分を知るためにも、諦めずに色々挑戦してみる必要があると現在は考えている。(問題発見型)

### 【到達状態】

各反応は、以下の4タイプのスキル獲得に到達したものとして分類できることが分かった。

(イ) 自分自身への適応スキル (不快感が減少したり、意欲的に生きていくためのスキル)

問題解決型：(1-1), (1-2), (6-3), (9-1), (9-2)

問題発見型：(6-4), (10-2)

(ロ) 対人関係スキル (人間関係を円滑に行うためのスキル)

問題解決型：(2-1), (3-3), (4-1), (5-1), (5-2), (8-1)

問題発見型：(2-2), (2-3), (3-1), (3-2) 意味理解型：(6-1), (6-2)

(ハ) 学習スキル (学習を効果的に行うためのスキル)

問題解決型：(7-1), (7-2) 問題発見型：(10-1) 意味理解型：(6-5)

(ニ) 消費行動スキル (宣伝戦略の影響でなく、適切な判断で購入行動ができるスキル)

問題発見型：(1-3)

これらの結果から、一般意味論の学習によって個人または社会への適応スキルを獲得していることがわかる。

## 考 察

以上の授業履修者の反応の整理が示すように、一般意味論の学習によって、自分が持っていた課題が解決したり、新たな問題点が発見できたり、よく分かっていなかった意味が理解できたりし、その洞察の結果として、自分自身への適応や社会への適応に必要なスキルの一部が身に付いていることが分かる。ここで強調しておきたいことは、これらの反応に示されている具体例が、書籍内で示したり、教員側から授業中につけ加えた例でなく、いずれも学習者が自分自身で体験した場面になっていることである。つまり、学習した原則を独自の場面で応用しているということである。テキスト中にも沢山の事例が出てあるので、それがそのまま書いてある場合には実体験したのかどうか判別できないが、(4-1), (9-2) などを見れば、変化があったことはま

ず間違いないと分かる。従って、学習による自己成長が実感できるような心理学の体系として、一般意味論が有効であることは確かめられたとあって差し支えないであろう。

次に、反応パターンが「問題解決型」「問題発見型」「意味理解型」の3通りであったことに基づき、一般意味論の学習者にとっての有効性について更に検討を加えておくことにしよう。

一般意味論を学習して、以前から抱えていた「問題が解決」したという場合は、次に同じような事態が生じた時に、比較的容易に成功体験の記憶が再生されて、一般意味論的発想で外在的に考えて再度解決に成功したり、予め課題を抱え込まないように手を打つことが考えられる。

これに対して、「問題発見」のために一般意味論が役立った事例の場合は、学習後に更に問題発見に役立っていることは、絶えずチェックリストで点検するような習慣がないと難しいかもしれない。こういう習慣は、自発的獲得意欲がないとつけることは不可能なので、学習者に原則をまとめて提示するだけでなく、同時に何らかの点検への動機づけが必要であろう。

「意味理解」に関しては、原則の(6)に集中していた。これは、言語を伝達手段としか見ていなかったために意味理解ができなかったのが原因であるから、一般意味論の学習により言語に前記号的用法があるのだということを知ってさえいれば、同種の言語の用法については学習後も継続的に理解可能になるであろう。

従って、原則の継続的 point check への動機づけこそが最重要留意点だと考えられる。

最後に、本研究の限界を述べておくことにする。本研究は、学習者の自由記述による反応を求めているだけで、量的な測定ができていない。従って、10の原則のうちどの原則が活用されやすいかなどの細部の分析が不可能になっている。もっと言うなら、10の原則自体が更なる吟味を必要としている。

人は「うまく考えがまとまらないな」などと自分が考えている状態を更に見守ることができ、この働きをメタ認知というが、10の原則は実は「メタ認知」を効果的に働かせるための方略になっている。そう考えた場合、(1)から(6)はモニターすべき点を示しているし、(7)以降の原則は思考をうまくコントロールするための方略である。本研究では従来から一般意味論で示されていた原則を尊重しているが、このように原則の中には性質の異なるものが混在しているので、量的研究に乗せるためには、まず原則を整理するところから始めねばならないであろう。本研究は、一般意味論の体系で心理学を学習すれば、学習者の適応行動に貢献することが可能であることを示した第一歩に過ぎない。

(注) それ以前の授業においては、ハヤカワ(1985)をテキストにし、心理学上の知見は授業中に口頭で紹介していた。

## 引用文献

Ellis, A. (1994). *Reason and emotion in psychotherapy: A comprehensive method of treating human disturbances. Revised & updated.* New York: Carol Publishing Group.

藤澤伸介 (2011) 『言語力 —認知と意味の心理学—』(新曜社)

ハヤカワ, S. I. (1985) 『思考と行動における言語』原書第4版 大久保忠利訳(岩波書店)

ラポポート, A. (1965) 『一般意味論 —人間の目標と科学—』真田淑子訳(誠信書房)